

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

農事組合法人「日本緑茶宇治田原」代表理事

森田木一さん

「宇治田原の茶を維持・発展させるために、茶農家が力を合わせるモデルとなるような大規模な茶園を築きたかった」と話すのは、宇治田原町の「農事組合法人 日本緑茶宇治田原」の代表理事、森田木一さん(70)だ。

14畝の山林を開墾した茶園で昨年、苗木定植が完了した。「苦勞が報われるのは、これからだ」と目を細める。

「日本緑茶発祥の地」として知られる同町で、地元の森林組合が所有する山林をまとめて借り受け、町の支援を受けて開墾を始めたのは2007年。

「農家の高齢化と、急斜面での重労働で後継者不足が顕著にな

り、茶園が荒れていくと案じた。モデルとなる大規模な茶園を築くことで、宇治田原の茶を引き継ぎたいと考えた」と話す。

森田さんの呼び掛けに賛同して同町の中心的な茶生産者10人が集まり、経営責任を明確にするため、工事が完成した10年に同法人を設立した。

しかし、ここまで来るのは平坦な道のりではなかった。新たな開

墾地のため、土壌改良に苦心。肥培管理が、個々の茶業経営とも重複したからだ。

茶の嗜好(しこう)も煎茶から抹茶、今では抹茶に加えて玉露やてん茶などに移り変わり、ニーズに合わせた生産が求められている。

法人の設立当初から代表を務める森田さんは「当初の計画通り、13畝で苗木の定植が完了したこと



▶自慢の茶園で、宇治田原茶の生産拡大に取り組む森田さん

大規模茶園の模範に

で、これからは成木が増える。乗用茶摘採機が使えるようになり、茶葉の刈り取りが飛躍的に向上する」と期待している。

府の事業を活用し、昨年300機の防霜ファンを設置するなど、設備も充実させた。生産した茶は、主にJ A京都やましろを経て全農京都茶市場に出荷。今後増量を見込む。

森田さんは、「11人のチームワークで、ここまで来ることができた。まずは、自分の世代で法人経営の基礎を築き、これを後の世代に引き継いでいきたい。今後は、海外輸出も視野に入れ、輸出先の規格に合った栽培にも取り組んでいきたい」と話す。

■法人所在地 宇治田原町大字立川小字宮ノ本22(事務局) J A京都やましろ宇治田原町支店。(電) 0774(888) 2034。

■法人概要 2010年2月設立。役員11人、パートタイマー約20人(農繁期)。栽培面積13畝(品種は鳳春、さきみどり、さえみどり、つゆひかり、あさのか、やぶきたの6種、約30万本)。農機具 乗用茶摘採機1台、防除機1台、複合管理機1台。